

令和元年度第2回南あわじ市総合教育会議（議事要旨）

1. 日 時 令和元年11月26日（火）

午前10時00分開会

午後 0時00分閉会

2. 開催場所 南あわじ市役所 第2別館 第5会議室

3. 協議事項

「学ぶ楽しさ日本一」

～ 具現化に向けた取り組み例 ～

① アクションプラン

② コアカリキュラム

③ アフタースクール

④ 育児力の強化

4. 出席又は欠席した構成員氏名

出席構成員

<南あわじ市>

南あわじ市長 守本 憲弘

教育委員 数田 久美子

教育委員 宮崎 典弘

教育長 浅井 伸行

教育委員 岡 一秀

<学校組合>

管理者 守本 憲弘（兼務）

教育長職務代理者 狩野 時夫

教育委員 宮崎 典弘（兼務）

教育長 浅井 伸行（兼務）

教育委員 数田 久美子（兼務）

教育委員 本條 滋人

5. 事務局関係職員氏名

総務企画部付部長 青島 一路

市民福祉部副部長 西庄 登

教育次長 仲山 和史

学校教育課長 山川 直樹

体育青少年課長 原口 言美

教育総務課主事 土居 久代

ふるさと創生課長 柴井 賢次

子育てゆめるん課長 西岡 義文

教育総務課長 中村 尚之

社会教育課長 福田 龍八

教育総務課係長 板野 あゆ美

1 開 会

2 市長あいさつ

3 議 事

「学ぶ楽しさ日本一」について

(1) 学ぶ楽しさ日本一の協議内容及び全体像について

《事務局説明》

【市長】 ただ今の説明を踏まえ、各委員から、ご感想やお考え等を伺いたい。

【委員】 保育園から中学校まで幅広く子どもたちがいる中で、各年代によって学ぶ楽しさも変わってくるのではないかと。子どもたちが主役となって、それに対して学校等周りがお互い同じ方向を向いて「学ぶ楽しさ」を理解しながら進めていけたらより良いのではないかと。個人的に感じるのは「学ぶ楽しさ」というのは、子どもの中で成功体験や自分の中で「わかった」「できた」という「嬉しいな、楽しいな、良かったな」ということが楽しさの一番ではないかと。個人差がある中で皆が皆、同じことに対してそういう感情を持つか持たないかは別として、「楽しいな」と感じる体験を数多くしていってもらえたらと思う。

【委員】 色々な意見がうまくまとめられていて、向かう方向がよく分かったと思う。この流れを学校の中だけではなくて、家庭や地域を含め市全体でアピールして、皆がこういう方向で行く、という理解や支援を得られる方向をどのようにしていけばいいのか。

学校の中では教員の資質向上が必要であり、家庭や地域でも、はっきりした目標が理解できていれば、もっと適切な応援ができると思ったりもする。子どもたちの生涯を考えた中での支援体制を、市を挙げてお願いしたい。

子どもたちを取り巻く環境が、ゲームやテレビ等のメディアにどっぷり浸かっている。今は何でも「やばい、やばい」と言う。良い意味でも悪い意味でも「やばい」という。テレビに出てくる色々な芸人も皆も同じように「やばい、やばい」と言っている。そういう流れの中で、子どもたちが一つの価値観に流されたり、ゲームの影響で人間は生き返ると信じている子どもたちに対して、どう切り込んでいくか。どう子どもたちを守っていくか、どう子どもたちに教えていくかが気になっている。

読解力は急に身につかないということを経験した時に、幼児からどれだけ本を読んできたか、ということが読解力につながっていた気がする。どういう風にその

力をつけていくか、色々な工夫なり方法が必要ではないかと思う。

【委員】 「学ぶ楽しさ日本一」について具体的に集約されつつある、という感想を持った。この取り組みを通して「学ぶことが楽しい」「学校に行くのが楽しい」という子どもたちが増えてほしいと願っている。学ぶことが楽しいということ、何回も積み重ねることによって、将来の目標や夢が、子どもたちについてくるのではないかと思う。でも、学ぶ楽しさを作るのは誰か、作るきっかけを作るのは誰か、というと教師にかかる部分が非常に大きいのではないかと考える。教師が何をもって、学ぶ楽しさを子どもたちに身につけさせるのか、というところをしっかりと一人一人の教師が、明確な考え、ビジョンを持っていないといけない。直接子どもたちに関わる先生が、何も考えていないと、せっかくこの取り組みをしているのに子どもたちに伝わるのか。主役は子どもたちなので、「自分は国語の読解力で身につけさせる」「私は音楽で学ぶ楽しさを身につける」「体育でつける」そのような考えを、先生一人一人に浸透させる必要がある。子どもたちに、やればできるという考えを持たせる、というのが大事。ゆくゆくは、「学校が楽しい」「学ぶことが楽しい」ということは最終的にはいじめ0(ゼロ)を近づけることにも繋がるし、不登校0(ゼロ)を近づけることに繋がるのではないか。この取り組みを通して、いじめ0(ゼロ)、不登校0(ゼロ)に近づけてほしいという考えを持っている。

もう一つが、日本一という大きい目標を掲げているが、順番をつけてしまうと一番がいれば理解が遅い子、発達課題を持っている子もいるので、一人一人を大事にする教育も大事ではないかと思う。

【委員】 いつもこの「学ぶ楽しさ日本一」で発言するのは、「褒めるというのが近道ではないか」ということ。子どもは「認められる」ということが、一番楽しいことではないかと思う。認められるには褒めてあげないと、自分自身も元気が出てこないし、自分が素晴らしい人間だということを、自分自身がわかっていかなければなかなか楽しいことに繋がっていかないのではないか。一番褒めてほしいのは学校の先生。学校の先生に褒めてもらったら、子どもは一番元気でくるのではないか。講義型の授業では、認めるとか褒めるとかいう場面が出てこないで、学び合う授業、子どもの発言が多い授業に変えていかないと子どもの良さはなかなか見つけにくいと思う。子どもの発言が多い授業は、楽しそうな雰囲気もするし、褒められて一番楽しいのは学校の先生だと思うので、授業改善が必要だと思う。

次に褒めてほしいのは友だち同士。一番長く付き合っている友だち同士で、認め合う、褒め合うというのが、子どもの成長にとって良いのではないか。子ども同士で良いところを見つけてくれたら、相乗効果で子どもが成長するのではないか。

3つ目に褒めてほしいのは親、家庭。親に認められたら、元気がでてくるのではないかと思うし、そのためには親子の触れ合い、会話の時間が多い家庭でなければ、子どもの良さというのは見つけにくいと思うので、親に褒められることも、子どもが「学ぶ楽しさ」を見つけるのには良いのではないか。

あとは地域。市民キャンペーンをうって老人会、自治会を中心に何か行事をできないかという気持ちがある。広報などで宣伝してもらったり、色々な会合で喋ってもらったりしながら。貶し合いは地域ではよく聞くけれども、地域の中で褒め合う、というのは滅多に聞かれないので、地域の中でも素晴らしいところは素晴らしいと言えるような雰囲気、市全体で作っていったら良いのではないか。

【委員】 このリーフレット、よく考え整理されていると思う。今回の学習指導要領で改訂になった部分を、きっちり押さえている。学習指導要領の改訂で気になっていたのが、今まで学力が全面に出されていたのが、今回の指導要領では消えている。評価も変わり、今までの4観点から3観点到になり、その第1観点が知識理解だったのが、今回知識と技能を先に求めて、次に2点目で思考力、判断力、表現力、最終的に学びに向かう力、いわゆる人間性を評価していこう、という流れになっているが、それをうまく網羅しながら整理されていると思う。

学ぶ楽しさは、7観点の中でキーワードが「わかる」「できる」「想像する」「チャレンジ」「協働」「ふるさとを思う」を織り込んでいる。この形を実践できれば、南あわじ、それから淡路全体にも普及するのではないかと考えている。そのベースになるのは、自己肯定感が大事だと思う。自己肯定感を持っている子ども、自分自身を認め、そして志を持ち、将来に夢を持つ、というところを培っていく中で、日本一に繋がると思う。

教師が力をつけたら、子どもたちも学び、分かり、楽しいという日々の授業展開ができるのではないかと思う。

最後に私が1点気になるのは、最近よく言われるソサエティー5.0、いわゆるAIの時代になる中での視点も、多少入れても良いのではないかと感じた。

【教育長】 学ぶ楽しさ日本一の全体像について、教師、管理職、保護者、幼児教育の関係者、大学関係者、色々な方から意見を頂いたが、そこで特徴的なことがあった。一つは非常に好評だった。「学ぶ楽しさ」という言葉の響き方、中身、色々な捉え方があるが、共通している部分は非常に好評だった。もう一つは色々な要素があるが、それぞれが考えている要素は、非常に共通していた部分があるのではないか。そのような特徴があったと私は理解している。それは「学力日本一」ではなく、「学ぶ楽しさ日本一」ということに、着眼したことに関して非常に素晴らしい、という評価を頂いたと思っている。得てして教育の評価というのは、イコール学

力状況調査みたいなことが議論されることがあるが、そうではなくて多面的な面を持った子どもたちが、一つの要素だけで評価されて良いのかという疑問を、皆さんが持たれていたのではないか。そういう意味では、多面的な子どもたちの成長を促す可能性がある、学ぶ楽しさの中には、子どもたちを成長させる非常に大きな可能性を皆さん感じられた、というところが共通した部分ではないかと思った。

市長からも課題として頂いているのが、情報発信をどうするのか。市全体、地域全体に、それを知らしめていくにはどうするのか、という課題を頂いている。できるかどうか分からないが、今考えているのは、学校で取り組みを発表するのではなく、商業施設を使って、学校の取り組みを情報発信することが可能かどうかも含めて、情報発信の仕方について、これから工夫をしていくという部分と、市全体でという話になった時に、学校教育だけではなく幼児教育から高校まで一貫した、学ぶ楽しさみたいなものを、構築する必要があると思っている。

幼児教育の方は、子育てゆめるん課とも協力しながら、どんな取り組みができるかを議論している。また、淡路三原高校とも協定を結ばせてもらって、一歩前に進んでどんなことをできるかを、協議させてもらっている。そうゆう風に長いスパンの中で考えることが必要だと考えている。

あと、教師に関わる部分が非常に大きいと思う。そこは、これからやろうとしている、スクールチャレンジ事業が、大きな柱になるのではないかと考えている。授業改善、教師がこの取り組みについて共通理解をする、その中身については、スクールチャレンジ事業の果たす役割が、非常に大きいのではないかと考えている。

一人一人を大切にという話があったが、これは授業が分かる、自分自身が理解してもらえている、そういう分かってもらえる部分と、褒めるという部分が一人一人を大切に、ということに繋がっていくのではないかと思う。

【市長】 色々なお話がでましたが、いくつか私が気付いたところを申し上げますと、一つは「学年によって楽しさが変わる」ということで、全部が適用されるということではなくて、成長段階によってどこが重点になっていくのかが違う、というところも考えていく必要があるのではないかということ。

それから、何人かの方から頂いたのが、学校の中だけの世界ではなく、社会全体に広げていかなければいけないということ。これはどちらかというと、市長部局の方の役割になってくるのかもしれませんが、今、ここにも入っている「高齢者元気活躍推進事業」というのをやっているが、その中でも「子育て」ということが柱の一つになっている。まだ具体的には、そこまでできていないが、少しずつ保育園での読み聞かせにも参加頂く方も増えておりますし、それだけではなく

アフタースクールで一緒に遊んでもらうとか、そのようなところも含めてやっていく必要があると思っている。将来的には、ジジババ育児教室みたいなものができたら、今、うずしお学園という高齢者の大学をやっているが、そういうところでも、含めてやっていけたらという考えは持っている。

それから、学び合いとか褒め合うというところというところ、**「褒める」**という部分、何に着目をするのか、というのがある。褒める行為というよりも、どちらかというところ、結局褒めようとするところ**「相手をよく知って、良いところを見つける」**その部分が大事なのかなという感じがした。

最後に、この中で言われて、そうかなと思ったのが**「ゲームとかやっている人間は生き返ると勘違いする」**という部分。この中に少し趣旨として入れた方が**良い**と思ったのが、いわゆる**「リアルな世界に触れる」**というような要素が入っていても良いのかなという感じがした。本物に触れるというか。このアンケートの中でも沼島の**「その道の日本一を招いて」**、これも本物に触れるということで、そういう方向もあると思う。もう少しベタで、生き物なら生き物というその本物に触れて、理解をするということもある。一つ学ぶ楽しさに追加をするのか、あるいはこの1～7のどこかに紛れ込ませるのか分からないが、少しそれもあった方が**良い**のかという感じがしたので、またこれは事務局の方で考えて頂ければと思う。

(2) 「アクションプラン」「コアカリキュラム」について

《事務局説明》

【市長】 ただ今の説明を受けて、それぞれ各委員から、ご感想やお考えを伺いたい。

【委員】 スクールチャレンジ事業が主だという中で、先進校を視察研修しながら授業改善、教師力をつけるという意図が分かる。ただ単純に講師を招いた時に、教師自身の許容というか、受け入れる力をどう作っておくのか、というのもあると思う。加えてベースになる読解力が大切だということを、子どもにいくら本を読みなさいとか、どれだけ読んだとか、あるいはこの頃、読書貯金みたいなのがあって、ページ数とその金額を全部積算して、競うようなシステムを考えている図書館もあると聞く。

それは別にして、教師自身がどれだけ本を読んでいるのか、ということにもクエスチョンマークがつく。目の前の教材研究だけを最低やっけていても、自分自身

に余裕があれば、私も退職したらかなり本を読むようになった。現職の時はほとんどできてなかったのが、この仕事に就くまでの5年間はかなり本を貪る機会にも恵まれた。

具体的に進めようと思ったら、学校においては、教師自身がおすすめの本を廊下に出しておいて、その内容をコンパクトにまとめておけば子どもも「先生こんな読んでいるのか」と身近に感じる、というのも一つの手立てかなと思った。自身が受け入れられなかったら、子どもにいくら口先で言っても応えない。また子どもが読めば、共通の話題もそんな中から広がっていくだろうと感じている。

あと2点目のコアカリキュラムについては、本当に各学年、発達段階に応じて精査されているし、これをできたら本当に南あわじ市の力になるだろうと感じている。今年は奇数学年を主にやられているということだが、また次繰り上がれば次の学年でより深く知ることができるし、最終的には世界に発信できる子どもたちを目指していると、十二分に拝読できた。

【委員】 「読み聞かせ」は素晴らしい。子どもに本を読めと言っても、なかなかすぐ本を手にするような子は少ないと思うので、読み聞かせる中で「本は楽しい」ということを知らしていくのが大事。小さな時に何回も一緒の本を持ってきて、「読んで読んで」と何回読んだらいいのか、と思うくらい子どもは持ってくると思うけれど、そこを親が嫌がったりしていたら、本から離れていくのではないか。そこで親がどれだけ辛抱して、読み聞かせしてあげられるか。それと、学校でも読み聞かせのボランティアが入ってくれているところもあるが、読み聞かせで子どもが目もむいて話を聞いている。自分で読めというのも大事だけれども、読んで聞かせてあげるというのも、小学校の段階くらいで、非常に素晴らしい効果があると思う。あのようなボランティアが、もっと市内で増えてきたら素晴らしいのではないか。

もう一つ、淡路人形浄瑠璃、素晴らしい取り組みだと思う。外に行ったときに、自分たちの地域のことを、自信持って喋れることがある、というのは素晴らしいことだと思っている。こういうのは継続していけたらいいのではないか。

【委員】 一つ目のスクールチャレンジ事業の中で、授業改善をやっていると思う。その中で授業研究とかもしていると思う。その時に、評価を気にしてほしいと思う。この授業で、子どもたちが、学ぶのを楽しかったかどうか。参観した人から見て、この授業は、子どもたちが楽しく学んでいたか、とかの評価を気にしてほしい。それによって、授業も改善されていくのではないか。先ほど説明があったように、毎年評価検証を、もちろんすると思う。子どもから見て、学校が学ぶのが楽しいかとか、そういうアンケート。親から見て、地域から見て、子どもたちは楽しく

学校で学んでいるのかとか。毎年アンケートを継続する、急に成果は現れないと思うので、毎年検証していく中で、日本一に近づくのではないかと思う。そういうことを、南あわじ市全体で考えてもらえたらと思う。

【委員】 今どんな本を読んでいるのか、という実態調査をやったら良いのではないか。図書館とか学校図書、購入の基準はどうなっているのか気になったりする。

南あわじ市内であれば、どこで借りて返しても良い、という融通が利いてなかなか良いシステムだと思う。子どもが読んでいる本の内容と、どんな図書が揃っているのか、そういう辺りも知りたいと思う。どういう本を市として進めていくのか、ということも考える必要がある。

教諭の研修についても、読解力を中心とした研修が、これから進んでいくと思うが、その内容がどのように進んでいくのか気になる。グループでの学習が随分と進んでいるし、学校訪問をさせてもらっても、非常に上手くいっているところと、ややもすると、よく分かった子が先走りして、まとめて終わっているみたいな流れがあったりする。研修の質を、きめ細かに考えて頂けたらと思う。わからない子はそんな中でも、できる子に任せて、よいていることもあったりするので、読解力の研修を進める中で、全員が参加するような方向がほしい。ついていけない子が、不登校とかいじめとかにならないような方向が必要。できない子、分からない子をどう巻き込んでやっていくか、みたいなテクニックの研修をもっと進めて頂きたい。そうすれば、皆が分かる授業になったりするのではないか。できない子が、そこで離れていたり、少し変わった意見を言うことがいじめに繋がったりとか、それが学校に行くのが嫌になったり、その辺のケアが必要ではないか。その辺のところの研修を、充実させて頂ければと思う。

コアカリキュラムについては、本当に良いと思うし、郷土の誇りなのでこの流れは素晴らしい。だんじり唄などもやっているが、そういうことも周りに自信を持ってアピールできる材料と思う。日本人は海外に行っても、日本のこと、自分のことを何も知らないということが多いが、諸外国の人は自分のアピールするものを必ず持っている。日本人がよく恥をかいた、という話をかつて聞いたことがあるので、この流れは非常に素晴らしいと思うし、是非今後も進めて頂ければと思う。

【委員】 実践づくりの中で、スクールチャレンジ、授業改善等ある中で、子どもたちの色々な感情を引き出す中で、このコアカリキュラムの人形浄瑠璃は、色々な分からなかったこと、知らなかったこと、人形浄瑠璃を通じて、色々なことが感情的に出てくると思う。その中で、子どもたちもそうですが、先生方も知らなかったこと、感動したこと、色々な感情のことを先生の方からも先に発信してあげれば、

子どもの方も色々な形で気持ちとか感じたことを出しやすいと思う。コアカリキュラムの人形浄瑠璃を使った中で、子どもたちも、先生方も、思ったことをお互いに、気持ちの出し合いをすれば、より良く授業も進んでいくのではないかと思う。

【教育長】 アクションプラン全体の考え方は、共通するポイントがあるのではないかと思う。これはアクションプランにも通じる部分で、アクションプラン、その他具体的な取り組みということで出させてもらっているが、多くは何もかも新しいものにすり替えてやる、というのではなく、今学校でやっている同じような取り組みも随分ある。その課題を、もう一度整理して、どこに重点を置くのか、どこを改善していくのか、といった目で、この「学ぶ楽しさ日本一」の基礎を作っていた。そういうことで、学校が今取り組んでいるものをより後押しすると、スムーズに学校に入っていけるような形で、このアクションプランなり他の取り組みも、考えさせてもらったということだと思う。

特に、柱になるチャレンジ事業は、学校の先生方が議論し、それぞれの学校の現状を考えてもらい、どのような姿が学校の姿として良いのか、ということも頭の中に浮かべてもらいながら、その課題を解決するためにどんな取り組みをしたら良いのか、ということに使ってもらうのが考え方ですので、学校としての主体性、先生方の自主性をいかに引き出すか、ということがスクールチャレンジ事業の大きなポイントであると思っている。

色々な要素がそこに入ってくるが、スクールチャレンジ事業は、永遠の課題である「授業改善と教師の指導力の向上」が大きな柱になっている。それは、どの学校も共通する部分である。それ以外の部分は、「それぞれの学校の課題に対応して下さい」ということでお願いしている。この言葉の通り、「しっかり今までできなかったことに、チャレンジして下さい」という話をしている。そのチャレンジの仕方ですが、例えば沼島であれば、競争相手がいない、そしたら競争を外に求めたらどうか。一般の模試とか活用しながら、自分の校内だけでなく、全国の競争相手と競争させたらどうか、というような観点であるとか。例えば、一校50万予算をつけるとした時に、二校集まったら100万で何かできる。市内の校長先生が、全部共通理解をすれば、1,000万くらいのお金を、校長先生なり学校自体が、事業として取り組める。それぞれの学校が、単独で予算を使っていく。という考え方もあるし、いくらかずつそれぞれが出して、自分たちが考えた取り組みをしていく。市全体として取り組みをしていく。そういうことも考えられる、ということも校長先生たちに提案しながら、スクールチャレンジ事業を考えてほしい、ということをお願している。皆さんもそうですが、私もこのスクールチャレンジ事業には非常に期待している。

もう一つの柱の「読解力」ですが、ある意味では、小学校に入ってきてからでは遅い。いかに幼児教育の時に本に触れるか、本を読みたいと思うか、ということが一つ大きなポイントになるのではないかと、という考えで今子育てゆめるん課と議論させてもらっている。その大きな柱が、読み聞かせという部分だろうと思うが、その読み聞かせの部分については、特に親御さんに読み聞かせの重要性を知ってもらい取り組みが必要ではないかということが議論の中で出てきている。

また、学校教育でいうと、子どもたちが本を読みたいと思うような促す取り組みが一つと、読みたい時に読める環境整備も重要であると思っている。毎年学校の図書館の予算ということで、それぞれ予算配分しているが、それは主に図書館に行く。それとは別に特に子どもたちの学級文庫、手の届くところに読みたい本があるということも大事だと思う。読みたい環境というのは、そういう環境と思っているが、そこに別に学級文庫として読みたい本を置けるような予算をできればつけていきたいと考えている。それは担任の先生が選んだり、子どもたち自身が読みたい本はどんな本なのかを聞きながら、それぞれの学級での本の充実を図っていかせたいと考えている。

【市長】 全体的にいうと、スクールチャレンジを上手に活かしていきましょう、というところが非常に大きいのかなと思う。これを始める時に、私から二つお願いをしたのが、学ぶ楽しさをどう考えるか、どうやっていくかということ自体を、教育委員会が決めて、それを下に降ろしていくというのではなく、学校自ら、先生自ら考えるようにしてほしいということと、それを実際に試行錯誤したものを皆が見れるように、その試行錯誤が学び合えるように、ということをお願いしている。それがスクールチャレンジ事業であり、また発表会、私が最初に言ったのは、校長先生を全員並べて、「うちはこうやっています」と発表してもらったらどうかという話をしたのですが、具体的にはこれから考えていくと思いますが。やっぱりその取り組みを情報交換していったり、お互いに学び合うプロセス自体が大事なのかなと思っている。大体の方向については、ご理解が得られているように思う。

それから読解力の話がでてくるが、先生自身はどうなの？という話ですが、実は新井先生がやっておられるリーディングスキルテストを、市役所の職員全員に受けてもらった。結構仕事の力とリンクしている、という感じはあったかと思う。こういうことも、先生にも自ら理解して頂くということは大事かと考えている。

チャレンジ事業の、例えば講師を呼ぶというそれ自体は大事ですが、その後どう消化していくのが非常に重要であるというご指摘は、その通りだと思うので事務局の方もどういう風にこれをやっていくのか、学校を指導していくのか、考えて頂いたらと感じた。

同じ学び合いをする中でも、よくできる子がさっとやってしまうと、ついていけない子は結局取り残される、という話があったが、学校で授業を見させて頂くことがあって、できない時に先生が色々「こう考えたら、ああ考えたら」ということをおっしゃっていたが、それ自体を子ども自身に出させたらどうか、という話をした記憶がある。

全体的には方向性としてご理解を得られたのかなと思っている。またコアカリキュラムについても、高い期待を表明して頂いたと思うので、この方向で進めていきたいと思う。

アクションプランの中で一つ気が付いたのが、「家庭・地域での取組」の「地域・市民」のところで、「図書館」と「ふるさと納税」だけ出ているが、先ほどの市民の中から色々な学校に関わっていく人を増やすという意味でいうと、市民協働課の「高齢者元気活躍推進事業」も入れておいてほしい。

(3) 「アフタースクール」について

《事務局説明》

【市長】 ただ今の説明を受けて、それぞれ各委員から、ご感想やお考えを伺いたい。

【委員】 アフタースクールに期待をしている。子ども自身も学校の授業であれば、自信のない授業とか、嫌な授業だったら存在を消して「できるだけ当ててほしくない」とか、そんな感じのことが自分の経験上あった。アフタースクールだったら、普段の自分を出しやすいので、参加しやすいし言葉も発しやすい。ここで経験したことを、また学校の授業で自信を持って言えるようになったり、そういう風な経験をできる場であるのかなと思う。

現在はまだ八木小学校だけだが、どんどん広がっていってもらって、色々な体験ができる子どもが増えて、授業にも自信を持っていけたら良いと思っている。

【委員】 なかなか素晴らしい取り組みだと思うし、さっきおっしゃったように、教室の中ではなかなか自分を出せない子も、そこで出せる。不登校傾向の子どもが、学校は行けなくても、放課後だけそこに行けるとか、そういう場所であれば良いなという希望を感じる。フリースクールのようなものができれば、という思いがずっとある。家庭の事情だったり、色々な事情があると思うが、そういう子が行け

る場所だったら良いと思う。

人材育成で色々な方が、そこに来て下さるといふことも、色々な経験をされた方が色々な話をしてといふところで、学校とはまた違う雰囲気だったり、場であったりすれば、もっともっと広がりができるのではないかな。

ただ、今は社会体育で色々なところに行く子どもが多い中で、本当に行きたくても行けない子がいたりするので、その辺の調整が大変だと思う。本当に行きたい子が行けているのか、家庭の条件もあつたりすると思うが、そういうところをクリアする方法があればと思つたりする。

ただ、学校の教室ではない場所で、そういう場があるのは非常に良いことだと思う。行きにくい子や、分かりにくい子や、家に帰りたくない子とか色々いると思うが、そういう子が来て、生き生きと何かできる場所といふのは本当に素晴らしいと思うし、もっともっと色々な子どもが集まれば良いと思う。

【委員】 アフタースクールですが、良い事業をしていると思う。先ほども言われていたが、普段の自分、子どもたちは結構顔が違う。場、場で分けている子どもも結構いる。そういう時に、アフタースクールの中で「この子は凄く良い所がある」「凄く気になることがある」とか、その辺の小学校との連携も大事ではないか。再々持てないと思うが、夏季休業日などを使って、子どもの良い所とか気になる所を連携し合うといふところもよろしくお願ひしたい。コメントの交換だけでも効果があると思う。

【委員】 八木は結構な子どもの人数がいるが、小さな学校になれば、なかなか放課後に集まる子どもは、少ないのかなと思う。素晴らしい事業だと思うので、できるだけ多くの学校に広げていって頂けたら有り難い。

【委員】 基本的な始まりは、保育に欠けるというスタートから学童が始まり、学校週5日制が始まった時に放課後子ども教室、その一体型で先進的に取り組まれているといふことで頭が下がる。

今後、市内全域に広げる計画だとは思ふが、時宜を得た形での展開を期待している。

【市長】 方向性としては市内全域でといふことだが、やはりスタッフの問題といふのが非常に大きい。人を育てていかなければいけないし、もう少し気軽に関わって頂くようことも大事なのかと思つているのと、正直かなりお金がかかる。放課後子ども教室は三分の一と言ひながら、全然三分の一負担に止まらない負担になっているのが現状。この辺りは県の方にもお願ひをして、予算の方も手助けしてもら

いながら進めていく必要があると思う。

不登校の子ども、適応に問題があるお子さんにも来て頂きたいという思いはもちろんある。それがきっかけになって、また学校に戻るようなこともあると思うが、その辺は今後の課題かなと思う。今、担当課としては八木を回していくのが精一杯という状況ではないかと思う。これもおそらくスタッフが増えてくると色々なことができると思うので、その部分が一番の課題かと感じている。

2回ほど行って非常に印象的だったのが、16時頃にお母さんが迎えに来たケースがあって、子どもが「絶対帰れへん」と頑張っている、ということがあって面白いなと感じた。

(4) 「育児力の強化」について

《事務局説明》

【市長】 ただ今の説明を受けて、それぞれ各委員から、ご感想やお考えを伺いたい。

【委員】 幼児期から、学童以前に、大切なところをきっちりと押えているなど感じている。その中に、強みとして挙げている、三世代同居まではなかなかいかなくても、じいちゃん、ばあちゃんが近くにいるというのが、淡路の強みだと思う。これを活かさない手は絶対はないと思う。それを、行政がどのような形でサポートできるかということが次、財政的などところも引っかかっていると思うが。なかなか三世代同居とか一挙にはいかないが、ちょっと近くにいっても何かサポートできるので預けて、しつけはじいちゃん、ばあちゃんなのでしやすいと思う。じいちゃんが本を読んであげることも広まっていくだろうし、これを強みとして計画的にされたら良いと感じた。

【委員】 今は両親がずっと家にいる家庭は少ないと思う。両親とも働いていて、子どもを預け、迎えは年寄りが行く、というようにじいちゃん、ばあちゃんと接する機会が非常に多いと思う。じいちゃん、ばあちゃんを大切にする市であってほしいと思う。子どもへの影響も大きいと思うので、老人の力、パワーを発揮できるような地域であってほしいと思う。

もう一つ、じいちゃん、ばあちゃんが近くにいないという家庭も中にはあると思うので、その辺の支援をどうしたらよいか、そういうことも考えてほしいと思う。

【委員】 先程から言われているように、最近核家族がすごく増えてきていると思う。その時に、何処に家を建てようか、何処に住もうかと思った時に、少しでも環境の良い所を選ぶのが普通だと思うので、強みという言葉が出たが、発揮してほしいと思う。ただ、先日、幼稚園の先生、保育所の先生と話し合う機会があって、「小さい子10人とかを一人で見ている」「1歳児を見ている」と、大変な環境の中で働いているようで、朝7時から勤務したり、勤務シフトも色々大変だと聞いたので、働きやすい環境作りもよろしくお願ひしたい。

【委員】 保育所の様子を見ている、保育士がなかなか足りないと思う。特別な支援を必要とする子どもが、何処の保育所にもいると思う。その子どもたちが、できるだけ早くその特性が発見されて、早く適切な対応ができれば、次に小学校に行った時にスムーズに集団の中に馴染んでいくのではないかと考えている。その辺の手立てをしっかりとしてほしいと思う。なかなか保育士がいない、免許持っている人は全体的にはたくさんいるけれども、色々な事情で淡路に帰ってこないとか、求人を出しても集まらないという話があった。何か良い手立てはないか。少しでも余裕があれば、もっと手厚い保育ができるのではないかと考える。プラス特別な支援を要する子どもたちが、もっともっと手厚くされると良いと思う。

それと、核家族化の中でじいちゃん、ばあちゃんのパワーの活用の仕方があればと思う。それが南あわじ市の教育に関わるようなパワーになれば良いと思う。子育て中の母親たちが集まって、色々なことを喋っている空間があるということなので、そういうスペースがもっとあれば良いと思う。プラス子育てに関する適切な情報提供をできるような場所があったら良いと思う。

【委員】 8歳までが、脳の発達や色々な子どもを形成する中で凄く大事な時期だという話で、やはり基本は保護者がある程度、子育ての環境の中で色々していくというのが前提だと思う。保育士の不足でなかなか目が行き届かなかったり、したいことができなったり、そういうことがやはりあるかと思う。実際、市としても予算のこともあるだろうし、色々あるかと思うが、やはりまず人材の確保をお願いしたい。

自分の周囲でも、保育士免許は持って一度勤めたけれど、やはり重労働だし、他の保護者から色々なことを言われる、それを続けていくのには給与の面でもこれでは割が合わない、という話を聞くこともあるので、しっかりとくれる人に対しての対価とか、色々な形で補助できればもっと人材も集まるのではないかと。手厚く子どもを育てるサポートの一環として、そのようなことも考えて頂けたら、より南あわじ市に住みたいと思う人が増えてくるのではないかと。

【教育長】 先程のアフタースクールですが、課題は二つほどあると認識している。一つは重要な位置を占めるだけに、学ぶ楽しさの一貫性をどのように担保するかという課題があるのではないかと考えている。アフタースクールの一貫性を考えて、意識してどのように取り組むのかということ。本来は自発的な興味、関心に応じた取り組みというか、体験をさせるということだと思うが。

それと学ぶ楽しさ日本一の重点化されたものに、どう興味関心を引き出すのか。自発的な部分と引き出す部分との兼ね合いは、一貫性を担保するためには必要だと思った。褒める、認め合うことによって、自己肯定感を如何に育てていくのか、そのための言葉かけはどのようにしたら良いのか、そういうことに一貫性を持たせる。そのためには、研修みたいなものが非常に重要な位置を占めると考える。共通して同じ場所で、研修を受けるということは無理かもしれないが、その中身について情報を共有するということはできるのではないか。小学校でやっている研修、それをアフタースクールの指導員も、研修の内容について理解してもらおうとか、情報を共有することも必要ではないかと考える。

あと二つ目の課題は、如何に広げていくのか、広げられるのかということが大きな課題だと考えている。

幼児教育の部分ですが、人格形成の基礎を培う、これが一番大事なかなと思う。課題として核家族があって、育児力ということが書かれているが、それは保護者から見た課題、もう一つは子どもから見た課題みたいなものがあるのではないか。核家族によって、人との関わりが少なくなって、それがもしかしたら「不登校」とか「人間関係を構築する力が培われてない」ということに繋がるとしたら小さな時から他者との関わりを重視していくべきなのかなと思う。「遊び」「学び」ということがキーワードとして載っているが、遊び、学びのところでいかに多くの他者との関わりということを考えていくのか、子どもたちからの観点からいうと非常に大事な観点ではないかと考えている。

【市長】 一つは祖父母の役割ですが、今逆にお母さんに聞いたら「祖父母に預けたくないです」と言う方が結構いる。なんで、という部分が二つあるのではないかと考えている。一つは遠慮というか、どうしても借りを作ってしまう的な部分があるのかなと思う。もう一つは、教育方針が違う、というこの二つがあるように感じられるので、先程祖父母の育児教室みたいな話もさせて頂いたが、狙いはまさにこの二つに対処するというところにあって、一つは親が頼むのではなく、むしろ祖父母側から「色々和我々も勉強したから見てあげる」というアプローチができるようにならないだろうかということ。その時に、昔とは大分子どもの育て方も変わっているので、そういうところをちゃんと親と共通理解をしていますよ、ということをはっきりさせることで預けやすくなる。おそらく本当の親だったらと

もかく、義理の親に対して「ああしてほしい、こうしてほしい」と言うのはなかなか難しいということだと思うので、阿吽の呼吸で両方ともきっちりという知識を得ているよと、そこを担保すると大分変わってくるのかなと思うので、そういう風にできないかなと思っている。

子育て世代が集まるスペースに関して言うと、色々な指摘を頂いていて、今シニアにキッズスペースを作ったり、各公民館にちょっとした物、小さな滑り台などを用意して、子どもが親と一緒に時間を過ごせる場所作りを全ての公民館でやりたいと思っている。

保育士の確保については、実際苦労している。分かり易く言うと、南あわじ市はかなり市がやっている。公立という形でやっていて、正規職員として採用される方について言うと、必ず応募はある。ところが、嘱託あるいは臨時となると、なかなか厳しい。一つは、シニアの方に色々関わって頂くことで、もう少し大変な労働部分を軽減できないか。もう一つは、高望みかもしれないが、「学ぶ楽しさ日本一」の実践を通じて、南あわじ市で保育をやるとかなり面白いことができるという雰囲気作りも考えられる。

特別支援を要する子どもに関して言うと、たぶん保育士さんもそういうことが分からないので、手を焼いている部分は非常にあるだろうなと想像するので、現場の意見も聞きながら、専門家を派遣するみたいなこともできれば良いのかもしれない。

全体を通じて、こういう方針で進めることにほぼ異論はないということだと思うので、引き続き進めさせて頂きたいと思う。